

## 文武両道を成す高津高校男子ハンドボール部

高校 13 期 (1961 年卒) 主将 林 毅

前回の高津クラブハンドボール部誌は、昭和 37 年 1 月に発刊された。これは、OB 会が高津クラブとして社会人大会に参加していた、昭和 36 年の大阪府社会人総合選手権で大阪イーグルスを破り初優勝した記念誌である。大阪イーグルスは日本体育大学 OB で大阪の高校体育教官を中心にしたクラブで大阪の社会人大会では、何回も優勝をしていた強豪チームであった。これにより高津クラブは全日本総合社会人選手権に大阪府代表として出場した。昭和 34 年に高校男子ハンドボール部が大阪で初優勝し、昭和 35 年にも優勝があった、OB 会の高津クラブが社会人大会で優勝したことで、高津ハンドボールが大阪で 1 番になったのである。これを記念して浅野和郎氏(高校 12 期)が中心となって発刊されたものである。これら全てのことに参加できたことは、私のハンドボール経験では幸運なことであった。

今回は、高津高校男子ハンドボール部のことを、私の在籍していた昭和 33 年 4 月から昭和 36 年 3 月を中心に振り返ってみたいと思う。当時は、11 人制がハンドボールの中心で、冬季に 7 人制があつて、大阪でも 12 月に 7 人制の室内選手権があるのみであった。その後、世界情勢により日本も全国的に 7 人制ハンドボールのみに統一されたのは、昭和 38 年であったと記憶している。

高津入学当初、私は中学時代、野球をやっていたが高校では、他のスポーツでもやるかなと考えていた。1 年生のクラス担任

であった今中啓旦先生(当時のハンドボール部顧問教員)がホームルームの時間に、「高校では勉強も大事であるが、クラブ活動などもやって文武両道を達成する有意義な高校生活を送ってほしい。現にハンドボール部の先輩は、それを実践している。」と話された。初めて聞いたハンドボールというスポーツは、どんなものかと興味を持ち、練習を見に行つた。練習をされていた部員には、高津中学時代の先輩や同輩が多くいて、誘われて入部した。確かに 1 年先輩の浅野和郎、西原康夫、生野宙考さん達は、勉強もでき、クラブ活動、その上、自治会活動までされていたすごい人の集まりだった。

昭和 33 年 6 月から公式戦が始まり、新チームに 1 年生から GK 増田健、BK 田中聰吉、FW 林毅が参加した。後日談として、引退された GK 石崎寿夫さん(高校 11 期主将)の後を、増田と林のどちらにするかでもめたと聞いて、もし逆になっていたら私のハンドボール人生も変わっていたかもしれない。

新チームは、エース浅野和郎(高校 12 期主将)さんを中心としたチームでかなりのまとまりを見せつつあつたが結果を残せなかったのもので、コーチをされていた先輩 OB の指導も熱が入つた。6 月から夏の合宿にかけての猛練習は、高津高校ハンドボール球史にも残るものと思っている。(前の部誌を参考にされたい。)当時の大阪高校ハンドボールは、豊中、桜塚、寝屋川、三国ヶ

丘が圧倒的な強さを見せており、我が高津の先輩方もその壁に阻まれて、なかなか頂点に立てず、悔しい思いをされていた。新チームに新しい可能性があったので多くの先輩の後押しがあったと思っている。

11月の秋の地区別新人大会で豊中、桜塚に勝ち、リーグ戦全勝して自信が持て始め

た。そして、昭和34年2月、大阪府高校新人大会の決勝戦で三国ヶ丘を12対9で破り、念願の初優勝を果たした。先発メンバーは、

FW: 浅野、西原、生野、橋本、林、

BK: 白井、徳山、大賀、小林、田中、

GK: 増田



写真 決勝戦の後に撮った記念写真

写真の前列左から、生野宙考(2年)、白井康裕(2年)、西原康夫(2年)、浅野和郎(主将2年)、徳山二三夫(2年)、大賀康孝(2年)、小林良三(2年)、橋本浩一(2年)

後列左から、林毅(1年)、永田健吾(2年)、田中聰吉(1年)、増田健(1年)、中江義雄(当時OBでコーチ、同志社大)、植村佳久(1年)、斎藤英俊(1年)、土田元夫(1年)、渡辺斉顕(1年)、森憲敬(1年)、中江コーチの右頬部のガーゼは前日練習で渡辺とバッティングしたもの。創部以来、先輩方々も念願であった大阪での初優勝は格別であった。

2年生になって、昭和34年4月、大阪府民体育大会で、再度、三国ヶ丘を17対11で破り、2回目の優勝し、大阪第一代表で近畿大会の出場権を得た。近畿大会(於：和歌山)では準決勝で当時全国区だった兵庫県立工業に9対10の1点差で敗れ、残念ながら第3位であった。さらに、6月に行われた全国高校総合体育大会大阪府予選は、決勝戦で三国ヶ丘に8対9で敗れ、全国大会出場はならなかった。

3年生の引退にともない、13期生の新チームとなったが、主将に指名され、驚いた。

当時は中江義雄(10期)→石崎寿夫(11期)→浅野和郎(12期)→林毅(13期)と前年の主将が次期を指名することが慣例であった。

新チームの主将としては、他校から、エースの浅野がいない高津は弱体化すると思われることもあって不安で一杯であった。中江コーチに指導を受け、同期の仲間の協力で、チーム戦略で活路を見出そうと必死に練習をした。

昭和34年9月、国民体育大会大阪府予選があったが、決勝で桜塚に10対11で敗れ、2位。全国大会出場は、果せなかった。12月の大阪高校室内ハンドボール大会(7人制)では、豊中に勝ったが準決勝で寝屋川に9対10で敗れ、3位であった。

昭和35年2月の大阪府高校新人大会では、寝屋川、三国ヶ丘に勝ったものの、決勝戦で桜塚に9対10で敗れ、2位であった。新人大会2年連続優勝とはいかなかった。

5月の府民体育大会は、準決勝で三国ヶ丘に4対10で敗れたが、3位決定戦で東住吉を11対9で破り、大阪第3代表として近畿大会に出場した。残念ながら奈良育英に4対5で敗れた。

13期生のチームは小粒であったが、ほとんどの大阪府の大会でベスト4以内と健闘した。今から思うと時の運がなかったか、主将の勝負弱さが、優勝までもう一歩のところまでしか行けなかった原因であったのだろう。

同期生はよく勉強もしたし、練習では主将を盛り上げてくれたことを感謝している。

副主将の田中聡吉(阪大)、マネージャー兼務の渡辺斉顕(同志社)、GKの増田健(同志社)と共に、FWのパス役として黒子になってくれた植村佳久(慶応)、土田元夫(関学)、途中参加ながら活躍してくれた上嶋幸宏(京大)、BKでは森憲敬(京大)、井口邦男(京大)、斉藤英俊(京大)のみんながしっかり支えてくれた。

高津高校男子ハンドボール部の良き伝統、文武両道を成すは、しっかりと守られたと思っている。私を含めた上記10名は健在で、1年に1度同期会をして旧交を温めている。

後輩諸君のがんばりで、我々の果たせなかった夢が実現するのを期待しております。